

舞鶴城公園

M A I Z U R U J O P A R K

県指定史跡 甲府城跡



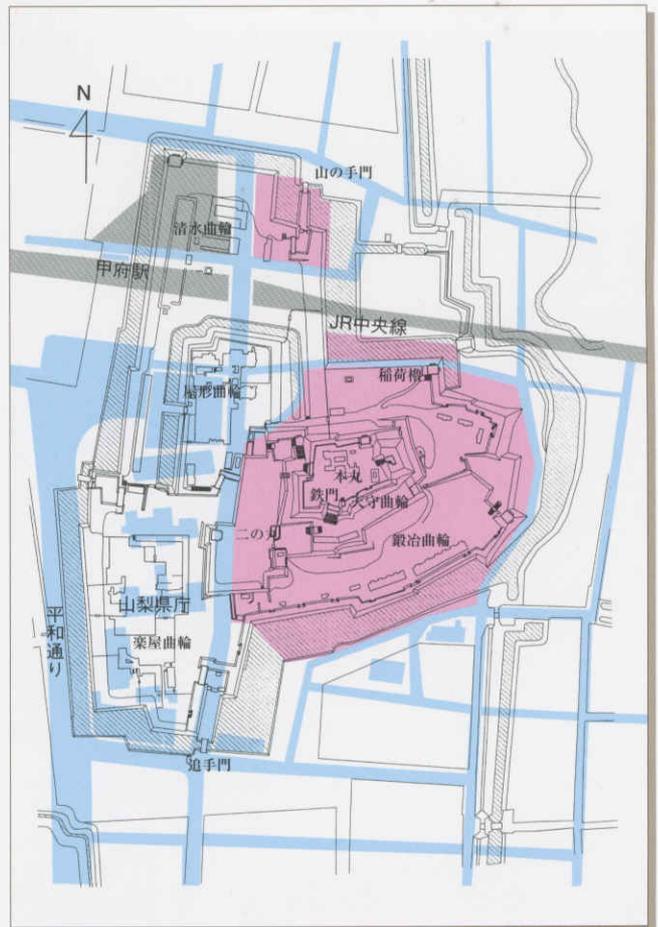
稲荷櫓



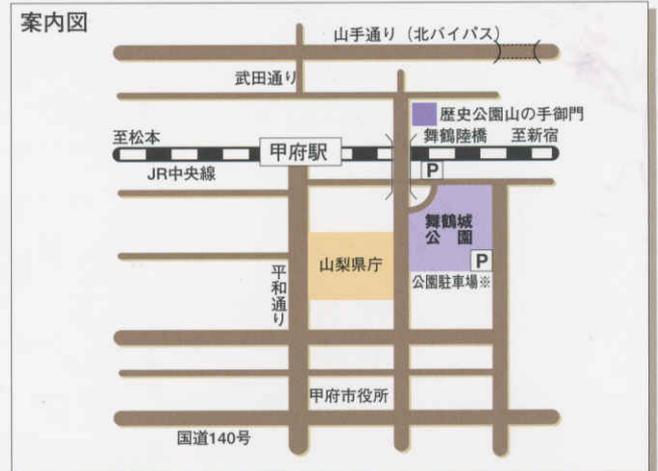
山梨県

甲府城年表

年	関連事項
1582(天正 10)	織田信長らにより武田氏滅び、信長の支配となる(城代:河尻秀隆)
1590(天正 18)	本能寺の変の後、徳川家康が甲斐を支配(城代:平岩親吉) 豊臣秀吉、家康を関東に移封
1591(天正 19)	秀吉、羽柴秀勝を配置 秀吉、加藤光泰を甲府城主とする
1593(文禄 2)	光泰、文禄の役に出征し病没 秀吉、浅野長政と幸長親子を甲斐に配置 この頃甲府城完成
1600(慶長 5)	関ヶ原の戦い 浅野氏が紀伊和歌山に転封。家康の支配となる(城代:平岩親吉)
1603(慶長 8)	徳川義直(家康九男)、甲府城主となる
1607(慶長 12)	義直、尾張へ転封し、甲府城番制(武川十二騎)となる
1616(元和 2)	徳川忠長(家光の弟)が甲府城主となる
1631(寛永 8)	忠長、謀反の疑いで幽閉される
1633(寛永 10)	忠長、高崎で切腹。甲府城番制(第2次)となる
1661(寛文 元)	徳川綱重(家光の二男)が甲府藩主となる
1664(寛文 4)	綱重、甲府城大修理を実施
1678(延宝 6)	綱重の子綱豊が甲府藩主となる
1704(宝永 元)	綱豊が六代将軍家宣となる
1706(宝永 3)	柳沢吉保、甲府藩主となり大修理を実施
1706(宝永 3)	荻生徂徠、「風流使者記」を著す
1709(宝永 6)	吉保が隠居し、子の吉里が甲府藩主となる
1724(享保 9)	吉里、大和郡山へ移封し、甲府勤番支配が始まる
1727(享保 12)	甲府大火で城内と城下に甚大な被害(本丸御殿、銅門など焼失)
1734(享保 19)	城内に盗賊が侵入(御金蔵破り事件)
1866(慶応 2)	勤番制を廃止して城代を置く
1868(慶応 4)	板垣退助率いる官軍が甲府城開城
1868(明治 元)	明治維新
1873(明治 6)	政府、甲府城を廃城とする
1876(明治 9)	城内を勲業試験場とする
1877(明治 10)	葡萄酒醸造所を設置(鍛冶曲輪) ※現存せず
1900(明治 33)	甲府中学校を建設(楽屋曲輪) ※現存せず
1903(明治 36)	中央線、甲府まで開通(清水曲輪等)
1904(明治 37)	甲府城跡を舞鶴公園として解放
1906(明治 39)	城内で連合共進会を開催。遊亀橋を建設
1917(大正 6)	甲府城払い下げ。村松甚蔵の寄付により県有財産となる
1922(大正 11)	本丸に謝恩碑を建設
1926(大正 15)	内堀の埋立て、県庁舎を建設
1928(昭和 3)	二の丸に武徳殿を建設
1953(昭和 28)	恩賜林記念館を建設(鍛冶曲輪)
1955(昭和 30)	内堀を埋立て、県民会館を建設
1965(昭和 40)	青少年科学センターを建設(稲荷曲輪) ※現存せず
1966(昭和 41)	県議会議員会館を建設(二の丸) ※現存せず
1968(昭和 43)	県指定史跡として告示(史跡名称「甲府城跡」となる)
1990(平成 2)	舞鶴城公園整備事業に着手
1997(平成 9)	鍛冶曲輪門復元完成
1999(平成 11)	内松陰門、稲荷曲輪門復元完成
2004(平成 16)	稲荷櫓復元完成。整備事業完了
2010(平成 22)	鉄門復元整備事業着手
2013(平成 25)	鉄門復元完成



現在都市開発された部分 現在残っている甲府城跡
甲府城敷地 約 20 ha、舞鶴城公園 6.2 ha



※公園駐車場はバス・身体の不自由な方の専用駐車場です。
ご利用の際は、あらかじめ下記中北建設事務所(土日祝日を除く)にご連絡下さい。

稲荷櫓・鉄門(櫓)

開館時間 午前9時から午後4時30分まで ※入館は午後4時まで
休館日 月曜日(祝日は開館)、祝日の翌日
年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)
入館料 無料

お問い合わせ

舞鶴城公園管理事務所(公園利用に関すること)

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1丁目5-4
TEL.055-227-6179(管理事務所) 055-233-6030(稲荷櫓)

山梨県中北建設事務所(公園管理に関すること)

〒400-0065 山梨県甲府市貢川2丁目1-8
TEL.055-224-1673
<http://www.pref.yamanashi.jp/ch-kensetsu/>

山梨県教育委員会学術文化財課(鉄門・史跡管理に関すること)

〒400-8504 山梨県甲府市丸の内1丁目9-11
TEL.055-223-1791
<http://www.pref.yamanashi.jp/gakujutu/>

山梨県埋蔵文化財センター(歴史・埋蔵文化財に関すること)

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923
TEL.055-266-3016
<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

社団法人やまなし観光推進機構

(観光ボランティアガイドに関すること)
〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1丁目8-17
TEL.055-231-2722
<http://www.yamanashi-kankou.jp/>

舞鶴城公園散策

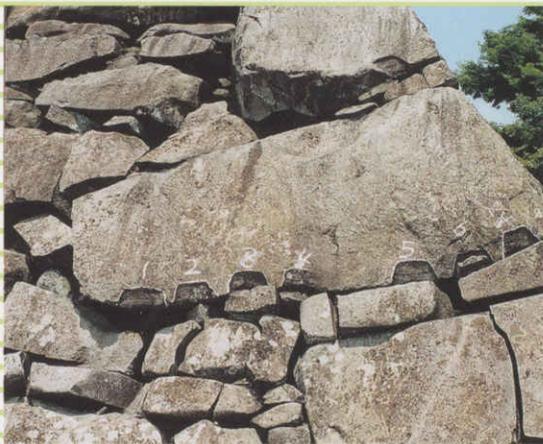
チョット探検!



きょうだいし 兄弟石

天守台西面の石垣には、もともと1つだった石材を分割して使った兄弟石が多く見られます。石垣を積みながらすぐ近くで割ったのでしょうか、この石垣の中に向きや位置がバラバラの兄弟石が確認できます。兄弟石は当時の石積技術を知る大きな手がかりです。矢穴の位置や石の形を見ながら、ペアになる石を探してみてください。

兄弟石は当時の石積技術を知る大きな手がかりです。矢穴の位置や石の形を見ながら、ペアになる石を探してみてください。



やあな 矢穴

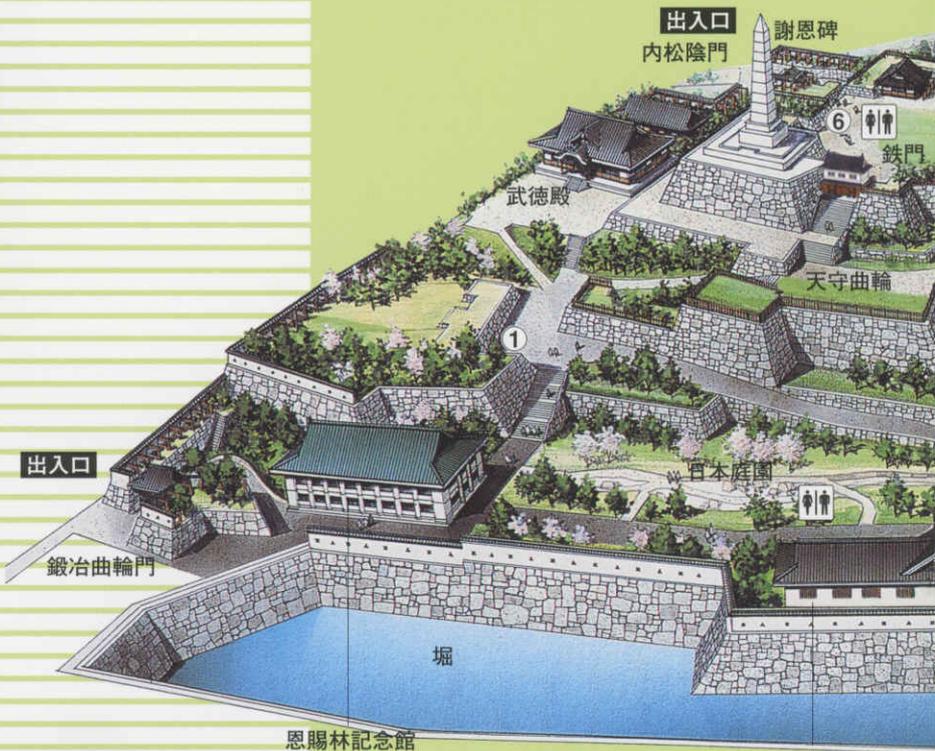
矢穴は大きな石を割るために開けた四角い穴です。公園内には矢穴を開けて割った石切場いしきりばが残っていて、当時の石割の技術を知ることができます。舞鶴城では時代によっても矢穴の大きさが違うので、石垣の積み方と見比べて探し出してください。
四寸矢穴(約12cm) 400年前の築城期 野面積み石垣
三寸矢穴(約9cm) 300年前の江戸時代中頃



うちまつかげもん
内松陰門 二の丸と屋形曲輪の間にある、切妻造で本瓦葺の高麗門。



かじくるもん
鍛冶曲輪門 楽屋曲輪と鍛冶曲輪を結ぶ門。切妻造で本瓦葺の一間一戸薬医門。



出土遺物

城内の発掘調査で出土した築城期の瓦



城内出土の陶磁器類

見てみよう!

① 坂下門石垣

② 水溜

③ 石切場跡

④ 数寄屋櫓跡

⑤ 会所(勘定所)跡

⑥ 銅門跡

⑦ 暗渠

⑧ 庄城稲荷跡

⑨ 煙硝蔵跡

積み方が違うことから、積んだ時代が違うと考えられている石垣が並んでいます。

絵図の中にはあまり描かれていない水溜です。具体的な用途はわかっていません。

ここから石垣の石を取っていました。

別名 異櫓と呼ばれ、明治時代初年までは存在していた建物がありました。現在は埋設保存されています。

年貢や作事・普請(工事)に関する事務を取り扱う建物がありました。現在は埋設保存されています。

本丸西側に位置し、鉄門と対だとされる門です。現地には当時の礎石が残っています。

水をうまく排水するためのもので、抜け穴ではありません。

鎌倉時代からこの地を守る庄城稲荷がありました。

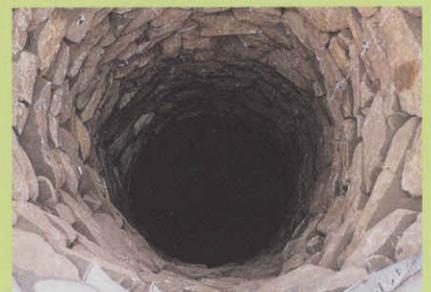
火薬庫がありました。現在は埋設保存されています。



稲荷曲輪門 稲荷曲輪と鍛冶曲輪を結ぶ門。切妻造で本瓦葺の高麗門。



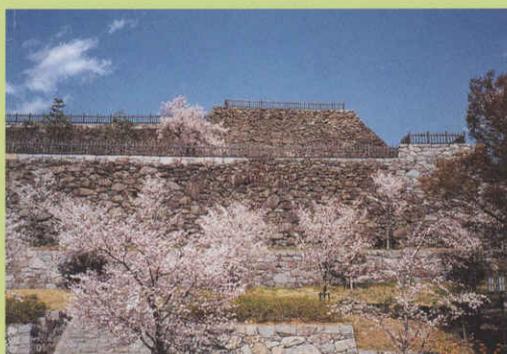
発掘された暗渠(本丸)



発掘された井戸(天守曲輪)



整備された園路と広場(本丸)



天守台



堀石垣下より検出された桐木

チョット一息!

温泉のはなし

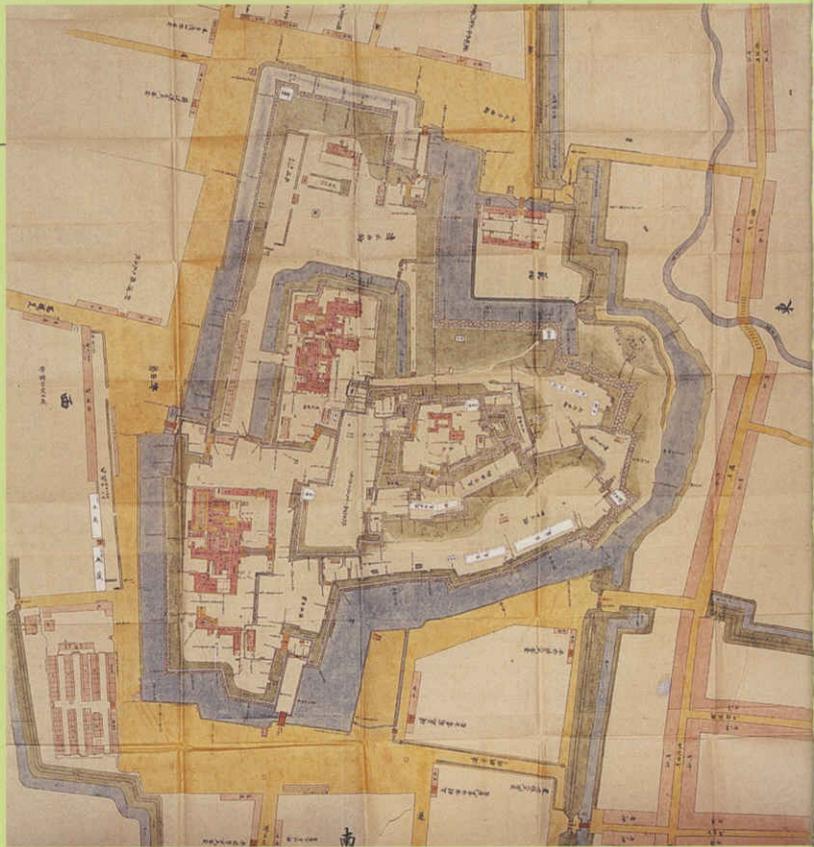
「温泉、御城内、楽屋曲輪の御門前水道に湧出つ、早天には湯煙たつ、御城内なれば、何症に應ずるといふ事は分ならず、眠気によしとの云伝へあるよし」(宝暦年間 野田成方『裏見寒話』)。楽屋曲輪(山梨県庁構内)には、当時温泉が湧き出ていたようです。効能は脚気・眼病と言われています。お城の中の温泉とは、これまた風流なことです。

甲府城の歴史

甲府城は、古くは甲斐府中城、一条小山城、赤甲城などとよばれていました。天正10年(1582)、甲斐国は戦国大名武田氏の滅亡後、織田信長の領国となりましたが、本能寺の変の後は徳川家康の支配を受けました。その後、豊臣秀吉が天下統一をなしとげると、秀吉は甲斐国に甥の羽柴秀勝、腹心の部下である加藤光泰、浅野長政・幸長父子を順に配置して築城を命じ、浅野氏のころ(慶長年間)に完成しました。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの後、江戸時代には再び徳川の城となり、将軍の子弟が城主となりました。宝永元年(1704)、時の城主徳川綱豊(のちの6代将軍徳川家宣)が5代将軍徳川綱吉の養子となると、綱吉の側用人柳沢吉保が城主となりました。武田氏にゆかりのある柳沢氏は、子の吉里にいたるまで約20年間甲斐国をおさめました。この間それまで城主が在城することのなかった甲府城で、御殿の新築や石垣の改修、城下町の再整備がおこなわれ、甲斐国は大いに発展しました。しかし、享保9年(1724)柳沢氏が大和郡山へ移封となると、甲府城は幕末にいたるまで幕府直轄地として甲府勤番制度のもと管理されました。

明治時代にはいと甲府城は廃城となり、明治10年前後には建物はすべて取り壊され、次第に市街化され解体されていきました。現在は本丸を中心とした内城の一部が城跡としての良好な景観を保ち、県指定史跡甲府城跡(舞鶴城公園)として保護されています。



甲府城絵図(柳沢文庫保存会所蔵『楽只堂年録』より)

舞鶴城公園としての歩み

甲府城は明治に入り、徳川時代の面影を大幅に失うこととなり、残された城跡が明治37年(1904)に「舞鶴公園」として開放されました。

県借用地であった舞鶴公園は、大正6年(1917)に正式に払い下げを受け県有地となりました。昭和3年(1928)の甲府中学校の移転に伴い、旧追手役宅跡にあった県庁舎や県会議事堂が楽屋曲輪跡に建設され、同時にその西側、南側の堀は完全に埋められました。その後、武徳殿(昭和8年)、恩賜林記念館(昭和28年)などが公園内に設置されました。

このような中、甲府市が戦後の荒廃した市街地の復興に併せて公園整備を進め、昭和39年(1964)には、甲府市の申請に基づき都市公園「舞鶴城公園」として都市計画決定され、以後広く県民の利用が促進されました。

また、昭和42年(1967)に県文化財調査委員会で甲府城跡の荒廃が議論され、同年7月に県教育委員会により「甲府城跡総合調査」が実施され、翌昭和43年12月に舞鶴城公園区域は県指定史跡「甲府城跡」として告示されました。

昭和60年代に入り、公園の改修を求める県民の要望が高まってきたことを受け、県として整備手法を検討した結果、県指定史跡では文化庁の史跡整備事業の導入が不可能なことから、都市公園事業として舞鶴城公園の再整備を行うことを決定しました。

そこで、整備計画を策定するに当たり、昭和62年度から平成元年度にかけ、文化財関係者を含む「舞鶴城公園再整備検討委員会」を設置し、舞鶴城公園整備計画を策定しました。事業にあたっては、甲府城跡調査検討委員会等に諮りながら、鍛冶曲輪門、内松陰門、稲荷曲輪門、稲荷櫓、鉄門の復元整備や煙硝蔵や井戸等の平面展示等を実施し、石垣についても詰石の補修など維持管理に努めてきました。

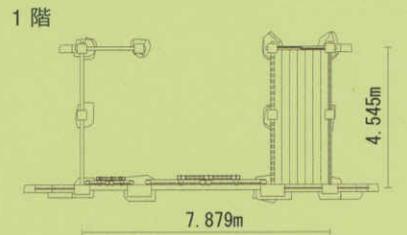
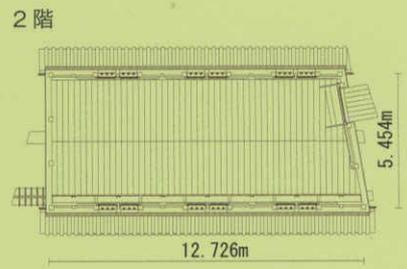
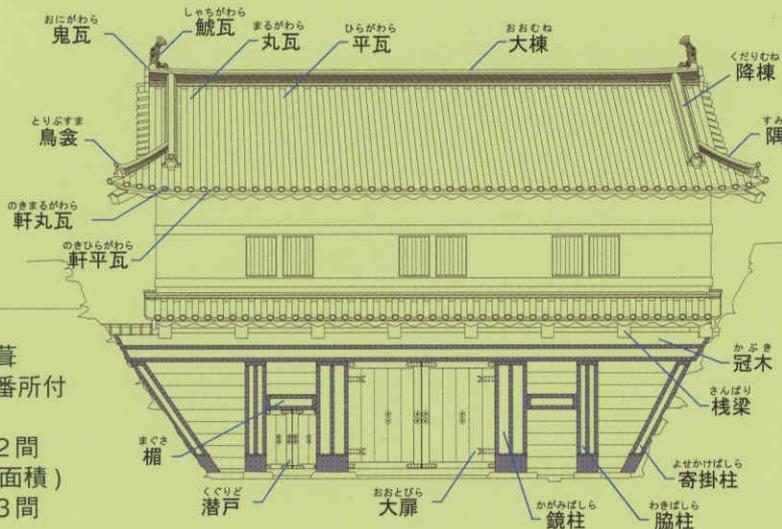
“舞鶴城”の由来

現在、舞鶴城公園として親しまれている甲府城跡。

舞鶴城という名称はいつのころからか白壁が重なりあう優雅な姿から、鶴が舞う雄大な姿を連想してつけられたものと考えられます。現在は約6ヘクタールが都市公園となっていますが、かつては20ヘクタールほどの広大な城郭でした。

鉄門の概要

鉄門は、本丸の南側に位置する2階建ての櫓門として、明治初年まで存在していたことが歴史史料等から判明しています。史実と伝統工法に基づき復元しました。



鉄門 南立面図

平面図

■規模
 三間一戸潜戸付渡櫓門
 木造 入母屋造 本瓦葺
 正背面庇付 一階東側番所付
 高さ：9,653 m
 1階：桁行3間 梁間2間
 8.26 m² (番所床面積)
 2階：桁行7間 梁間3間
 66.93 m²

門ができるまでの工程



復元作業中の様子



委員から指導を受ける様子（鯨瓦の製作）



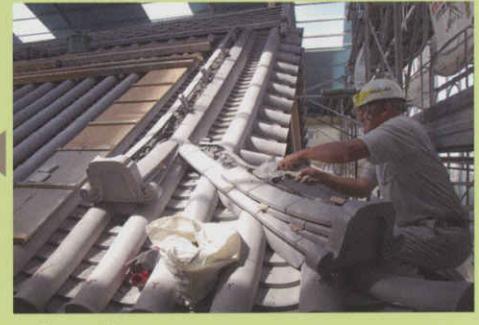
復元作業中の屋根



鉄門完成



左官工事の様子



瓦葺きの様子

甲府城跡古写真館

幕末に日本にもたらされた西洋の写真技術がとらえた、失われていく甲府城の姿。

明治時代初めに甲府城跡の北東、愛宕山から撮影されたこの古写真には、稲荷櫓や鉄門の姿が写っていることが解析によって判明しました。

このほかにも、当時の城内の様子を撮影した古写真が見つかっており、お城の姿や建物の様子を知るとも重要な資料となっています。稲荷櫓や鉄門を復元する際においても、復元根拠の1つとなっています。

(史料提供：三沢一也氏)



愛宕山から見た甲府城(明治時代初め)



舞鶴城公園の様子(明治時代末から大正時代初め)

新・石垣解体新書

400年間保たれ続けた石垣を未来に伝えていくために

舞鶴城公園の大きな見どころは、なんといっても石垣です。自然石を使った「野面積み^{のづら}」という技法で積まれた石垣は、天守台、本丸、稲荷曲輪周辺を中心に良好に残り、築城期の面影や構築技術を400年間伝える文化財的価値のある石垣です。

石垣を守る

舞鶴城公園では、石垣を後世に残すために、石垣の構造や構築技術を調査解明した上で、修理と保護をおこなっています。

現在は、残存している文化財的価値の高い石垣を対象に、詰石による補修工事などの整備を実施し、石垣の長寿命化と歴史景観の保護に努めています。

チヨットー息!



石を積む技術と石垣の構造を伝えるため、<石垣つめるくん>というミニチュア石積みキットがあり、多くの子どもたちに体験してもらいました。

石垣の構造



石垣は石材だけではなく裏栗石^{うらぐりいし}や盛土^{もりど}の三つの要素でできています。その他に石垣表面の目地^{めじ}に入れる詰石や石材を後ろで支える飼石^{かしいし}もあります。



着工前には、文化財専門職員による講習会をおこない、石垣の歴史的価値に対する理解を深めます。



現場では、すべての石材を点検、記録し、補修方法の判断材料とします。



作業では古い材料をなるべく使い、歴史的景観に違和感がなく、落石等が生じないように施工しています。



工事は、日常的な点検だけでなく、専門委員会による修理技術の指導を受けながら進めています。

伝統技術

稲荷櫓・鉄門の復元では、様々な伝統技術を使い、可能な限り建築当初の姿を復元し、見学会を通して伝統技術の公開にも努めました。

建築



手斧の実演の様子

稲荷櫓復元では多くを山梨県内産、鉄門復元では国内産の木材を使用しています。ヒノキ、マツ、ケヤキ等をそれぞれの特性に合わせて使っています。梁などは手斧と呼ばれる昔ながらの道具によって表面を削り、加工しています。

また、木造建築において木材を組み合わせる日本古来の技法である「継手^{つぎて}」と「仕口^{しくち}」を、箇所に応じて巧みに使い分けています。

左官



荒壁塗り体験の様子

土にワラを混ぜ、寝かせて土を腐らせ、粘り気のある壁土を作ります。次に、柱の貫の間に縄を巻いた竹を固定し骨組みを作る小舞かきをします。そして荒壁塗り、斑直し、中塗りというように段々ときめ細かい土を塗っていきます。

何層にも塗り重ねて厚くするのは、敵の攻撃や火災を防ぐためです。最後の仕上げで、白い漆喰を塗って仕上がります。

瓦葺き



土居葺きの様子（鉄門）

瓦は、出土した瓦をもとに復元製作しています。瓦を載せる前に、野地板という板を張り、その上に薄い杉板を竹釘で張る土居葺きをします。そして互受けの棧を付け、葺き土を置いた上に瓦を載せ、数枚ごとに銅線でしばり付け固定していきます。

稲荷櫓と鉄門は、平瓦と丸瓦を交互に用いて土で葺く「本瓦葺き^{ほんがわらぎ}」という昔ながらの葺き方で瓦を葺いています。